

六条裸麦の赤かび病とかび毒蓄積の抑制

技術の特徴

- ・六条裸麦の赤かび病発病抑制には開花期の薬剤散布が必須であること、かび毒蓄積の低減には開花10～20日後の追加散布が効果が高いことを明らかにしました。
- ・これにより、既知の小麦、二条大麦に加えて、六条裸麦の赤かび病防除とかび毒蓄積の低減対策が効果的に実施できるようになりました。

研究の内容

- ・六条裸麦の赤かび病の発病抑制とかび毒蓄積の低減に効果の高い薬剤散布時期を明らかにするため、開花期からの散布時期を変えた2年間の圃場試験を行いました。
- ・赤かび病の発病抑制には、開花期の散布が不可欠であることが示されました。
- ・かび毒蓄積の低減には、開花10～20日後の追加散布が有効であることが示されました。

六条裸麦に対する薬剤散布時期と赤かび病の発病、かび毒蓄積との関係

試験年次	散布時期 (開花後日数)	発病度	発病度 防除価	かび毒 (DON+NIV) (ppm)	かび毒 低減率 (%)
1年次	0	0.7 ab	82	1.6 a	43
	0, 10	0.5 b	88	0.9 b	68
	0, 20	0.9 ab	77	0.4 b	85
	0, 30	1.2 a	70	0.6 b	78
	— (無散布)	3.9	—	2.9	—
2年次	0	5.7 a	50	0.9 a	18
	0, 10	4.9 a	57	0.4 ab	60
	0, 20	4.9 a	57	0.3 b	72
	0, 30	6.7 a	42	0.5 ab	57
	— (無散布)	11.4	—	1.1	—

供試品種：イチバンボン。供試薬剤：チオファネートメチル水和剤1,000倍液。赤かび病菌接種圃場において試験を行った。発病度防除価、かび毒低減率は、[(無散布区の値－散布区の値)／無散布区の値]×100 から求めた。各試験年次の同一列の英字はPLSD法による検定で有意差なし(P<0.05)。

今後の展開

供試薬剤とは異なる作用機作・剤型の薬剤、六条皮麦についての検討が必要です。

参 考

宮坂ら. (2013) 九病虫研会報 59 (印刷中).



NARO

農研機構
九州沖縄農業研究センター



代表研究者： 宮坂 篤
所 属： 生産環境研究領域
病害研究グループ
問い合わせ先： 096-242-7729

〒861-1192 熊本県合志市須屋2421